

NHK高校講座を活用した基礎学力の養成と学習習慣の定着について

日本ウェルネス高等学校

はじめに

- 1 NHK高校講座活用の契機とその展開
- 2 人間教育の場としての高校教育
- 3 通信教育の方法による高校教育と基礎学力の養成
- 4 名古屋キャンパスにおけるNHK高校講座の活用について（報告）
- 5 NHK高校講座活用による基礎学力養成の効果について
- 6 NHK高校講座視聴による名古屋キャンパス生徒の学習成果について
- 7 NHK高校講座視聴の成果を踏まえた本校における「面接授業」の在り方について
- 8 名古屋キャンパスから他のキャンパスへの展開について（現状と対策）

むすび

参考文献

資料編

はじめに

本研究課題は、NHK高校講座を活用した「基礎学力の養成」と「学習習慣の定着」についてである。

本校の学習指導は、「基礎学力」の習得に重点を置き、また「学習習慣」の定着を目指している。この目標設定の理由は、次のとおりである。

「基礎学力」について云えば、本校が通信制高校であることによって教師による面接授業時間数が格段に少ないことである。この状況の中で、教科指導の水準を何処に設定するかと云えば、それは、「基礎学力」に設定するのが有効と云える。ここに「基礎学力」と云っても、学力の水準の低さを意味するものではない。それは「学」の基礎として、将来、生徒が進学・就職を問わず、様々な体験や社会経験を通して人間的成長をするにつれて形成される「教養の基礎」となるものと考えている。

また、「学習習慣」を身に付けることの意義は、高校の就学期間のみならず、今日、生涯学習やリカレント教育が要請される中であって、将来、生徒が社会人へと成長するに従って、必ず有益に働くものとする。

本校教育において、「基礎学力の養成」と「学習習慣の定着」の二つが合わさって、人生を「生き抜く力」となることを期待するものである。

また、現代は急速な高度情報化が進行し、それに伴う急激な社会変化が起こっている。学校教育における教育・学習の形態もその状況に対応した変革が求められている。この様な中であって、教育現場におけるICT（情報通信技術）の導入や科目履修におけるメディアの活用は、今後、一層促進されていくであろう。

この様な状況下であって、メディア一般の活用についての研究をすること、就中、「いつでも、どこでも、だれでも」が身近に利用・視聴できる「NHK高校講座の活用」を研究課題とすることは意義のあることと思う。

1 NHK高校講座活用の契機とその展開

本校が、通信教育の方法における「NHK高校講座の活用」の有用性について、その認識に至ったのは平成27年度のことである。その年の7月、四国地区高等学校通信制教育研究協議会（徳島市）に参加し、そこで、通信教育において高校講座の活用・研究がされていることを知り、これが契機となり本校教育への高校講座の活用・導入を検討することとなった。

平成27年当時の本校の学校規模は、収容定員600人、面接指導等実施施設（以下、キャンパスと云う。）は10施設を設置していたが、学校全体で、直ちに高校講座の活用を一律・統一的に実施することには困難があった。その主な理由は、抑々、生徒の指導に当たる教員自身のNHK高校講座に対する認知度が低かったと云う点である。また、その認知度を高めようとしても、そこにも困難があった。それは、本校が広域通信制高校である性格上、それぞれの施設（地域）単位で教員確保をし、生徒の指導に当たっていて、全日制や定時制の様に教員が一つの施設に一堂に集まっているわけではない。そのために、高校講座活用の有用性を唱えても伝達力が弱いと云う点がある。

その中であって、名古屋キャンパス（面接指導等実施施設）が、いち早く、その高校講座に関心を示し、その年の9月より高校講座活用の取組みを開始した。そして、本校が放送教育研究委嘱校として、その研究を開始した平成30年4月の時点では、その取組みから2年半が経過していた。このことで、この名古屋キャンパスを研究の重点施設として捉え、その施設において、高校講座の活用と研究を促進し、その実績を踏まえて他の施設に展開することを企図した。

そして、現在まで5年6か月余りが経過し、その間に、当キャンパスは、高校講座を通信教育学習の中に位置付け、学期（本校は、2学期制を採っている。）が進むにつれて、その高校講座を活用した学習指導と生徒の視聴習慣が定着して行った。

この研究報告では、上に掲げた研究課題に沿って、先ず、この名古屋キャンパスの取組みとその成果を報告する。次に、名古屋キャンパスの成果を基礎として、如何にして他のキャンパスに展開するかについて現況を踏まえて報告する。

2 人間教育の場としての高校教育

大多数の生徒が思春期を送る高校生活は、人間形成の上で最も重要な時期である。

ここに「人間教育」或いは「人間形成」を問題とするのは、「学力」（＝教養）は、人間形成や人間の成長と深く係っているためである。換言すれば、体験や経験による人間形成を通して、はじめて有益な「学力」（＝教養）が備わるものであり、その「人間形成」と「学力」（＝教養）の関係は、云わば、織り成す反物の経糸（たていと）と緯糸（よこいと）の関係である。

ここに、「人間形成」を「経糸」とし「知識の習得」を「緯糸」とすると云うことは、「人間形成」を主動因として、「知識の習得」が可能であると言う意味を含んでいる。逆に、「知識の習得」を可能とするためには、「人間形成」が図られなければならないと云うことでもある。

学校教育における人間形成（経糸）と知識・教養を身に付けること（緯糸）の大切さは、教育基本法（教育の目的）第1条「人格の完成～」及び（教育の目標）第2条第1項「幅広い知識と教養～」（資料編「1」参照）によって確認することができる。

また、本校は、私学としての「建学の精神」を掲げながら、「教育目標」を次の様に設定している。「学習・体験・スポーツによる実践を通して、徳育、体育の人間教育を施し、生徒自らが学び、考え、行動する能力を養い、併せて、生活習慣を正し、（中略）、、『生きる力』を育成する。」

（資料編「3」「4」参照）

とりわけ、当該名古屋キャンパスでは、「しつけ教育」とも云うべき教育を行い、朝のあいさつから進路指導まで、生徒一人ひとりに行き届いた、親身な指導と教育を行なっている。

この「しつけ教育」の中で学習指導を行ない、今日、NHK高校講座の活用とその視聴習慣が定着しているのは、この「しつけ教育」に拠るところが大きいと考える。

3 「通信教育の方法」による高校教育と基礎学力の養成

本校は、通信制高校であり、その通信教育の方法に従って高校教育を施し、学習指導を行なっている。そこでの基礎学力の養成には、学習指導（教科指導）の充実と生徒の学習習慣が定着することが必要である。また、その成果を上げるためには、生徒自らの、①学習の動機、②学習内容の理解、③学習内容の反復練習の「三つの要素」を深化・促進させることが必要となる。

本稿「4」では、基礎学力の養成に必要な上述の「三つの要素」と「学習習慣の定着」に着目しながら、名古屋キャンパスにおけるNHK高校講座の活用とその成果についての研究報告をする。

また、本稿「5」では、基礎学力養成の「三つの要素」に着目しながら、高校講座の活用が基礎学力の養成にどの様に関係しているかについても、名古屋キャンパスの実施状況に即して考察をする。

* 「通信教育の方法」については、資料編「2」参照。

4 名古屋キャンパスにおけるNHK高校講座の活用について(報告)

(1) 科目履修におけるNHK高校講座視聴の位置付け

通信教育の方法においては、科目履修は、家庭学習、添削課題、面接指導・考査試験と進み、その評価によって単位が認定される。

当該施設における高校講座視聴は、教科書学習の後にいき、その視聴後に添削課題の作成に取り組む。それを図式化すれば、次のとおりである。

教科書学習 ～ 高校講座視聴 ～ 添削課題 ～ 面接指導 ～ 考査試験 ～ 単位認定

* 現時点、(令和2年3月1日現在)、メディア利用による面接指導時間数の減免は行っていない。

* 将来、メディア利用とその成果が評価できる段階となれば、その利用による減免措置を講じる予定である。その前提として、減免措置を講じるための要件を整備する必要がある。(資料編「3」 「3-2」参照)

* 減免措置を採る場合でも、この高校講座視聴（メディア利用）の位置付けは変わらない。

(2) NHK高校講座の視聴

本校及び当該施設では、在宅で学習をする「在宅コース」の外に、面接指導等実施施設に登校して補習授業（正規の面接指導と区別）を受講することのできる「通学コース」を設けている。

(ア) 在宅コース生徒のNHK高校講座視聴

当該生徒は、家庭学習により教科書学習及び高校講座を視聴し、視聴後に「学習のまとめ」を行ない、その後に添削課題を作成して当該施設に提出する。

(イ) 通学コース生徒のNHK高校講座視聴

通学日（週2日）の補習授業は、1時限50分の3時限、その中の1時限を高校講座の視聴に充てる。その他の2時限は、基礎ドリル、添削課題に取り組む。

[高校講座視聴（50分）の時間配分]

時間配分	実施内容	資料等の活用
00分～05分	学習内容の説明	* 「学習メモ」の活用
05分～25分	高校講座視聴	* 「学習メモ」を同時学習
25分～45分	「学習のまとめ」	* A4用紙一枚に視聴内容、感想をまとめる。
45分～50分	授業のまとめ	* 担当教員の補足説明、まとめをする。

凡例：①「学習メモ」：番組を構成する資料 ②「学習のまとめ」（様式）：資料編「12」参照

③「理解度チェック」：視聴後に適宜に行う

当該施設におけるNHK高校講座の視聴方法は、生徒が教室で、一つのモニター画面を通して関連番組を視聴する場合と生徒個人が複数のパソコンを利用し、学習進度に合わせて番組を視聴する場合がある。

(3) NHK高校講座の視聴と学習の要領

(ア) 学習の動機付け

生徒に対し、高校講座視聴によって添削課題作成が容易となることの認識を持たせる。この目的意識を持たせることによって、高校講座視聴の動機付けとなり、また、その視聴習慣の定着に繋がる。

(イ) 高校講座の視聴

原則的に、添削課題の内容に係る全教科を視聴する。その他、生徒が興味を持つ番組があれば、添削課題科目以外であっても、その番組を視聴する。

(ウ) 放送番組と添削課題の「対照表」(資料編「9」参照)

当該施設では、独自に放送番組と添削課題内容の対照表を作成している。この対照表によって、生徒は視聴する番組内容と取組む添削課題の関連が分かり、視聴動機と目的意識を持って番組を視聴することになり、その分、内容理解も深まる。

また、施設で行う高校講座の視聴時間外であっても、生徒自らが、この対照表に従って計画的に高校講座を視聴し、家庭での学習や添削課題に取り組むことができる様にしている。

(エ) 「学習メモ」(「文字と画像で見る」)の活用

当該施設では、特に、番組視聴時に番組構成の要素である「学習メモ」(番組によっては「文字と画像で見る」が加わる場合がある。)を同時に学習する。番組内容によっては、番組視聴の前若しくは後に学習する。

番組が視聴覚にうたえて学習するのに対し、「学習メモ」は番組内容を活字によって学習することができる。この二つが合わさって学習効果が促進される。

(オ) 「学習のまとめ」(資料編「12」参照)

番組視聴後の約20分間を利用して、「学習のまとめ」(A4用紙1枚)を作成し提出する。この「まとめ」は、視聴した番組の内容やその感想等を手書きで記述する。

(カ) 「基礎ドリル」

「学習のまとめ」の後、添削課題(=番組)内容の基礎的な知識を確認するために準備した「基礎ドリル」を解き、その後に添削課題に取組み、その課題作成の後に課題提出をする。

* 「基礎ドリル」は市販の問題集を基本とするが、生徒の理解度によっては、その生徒に応じた基礎的な問題を提供する。

5 NHK高校講座活用による基礎学力養成の効果について

基礎学力の養成については、本稿「3」で、①学習の動機、②学習内容の理解、③学習内容の反復練習の三要素が必須であることを見てきた。

ここでは、高校講座視聴が、それらの三要素にどのように関係し、効果を齎しているかについて、名古屋キャンパスの実施状況とその成果に即して以下に考察する。

(ア) 学習の動機・関心

高校講座視聴に対する生徒の動機・関心は、凡そ、以下のとおりである。

- a 番組視聴によって、生徒が取組む添削課題の解答が容易になる。
- b 番組の企画や登場人物によって、生徒が番組に関心・興味を持つことになる。
- c 番組内容によっては、直接に単位認定に結びつかない番組にも関心を持ち、視聴する場合がある。(例として、「ロンリのちから」等。)
- d 一つの番組に興味・関心を持つと、他の番組にも関心を持つようになる。

高校講座は、どの番組も、生徒の家庭学習に供することを前提として番組編成が行われている。生徒の家庭学習は、基本的には自学習である。そのために、生徒の関心を引き、学習の動機を呼び起こし、学習に向かわせるための工夫があらゆる場面でなされている。この学習の動

機を呼び覚ますことは、車に例えれば、エンジンの始動にあたる。始動なき運転はない様に、動機・関心のない学習もないことになる。

(イ) 学習内容の理解

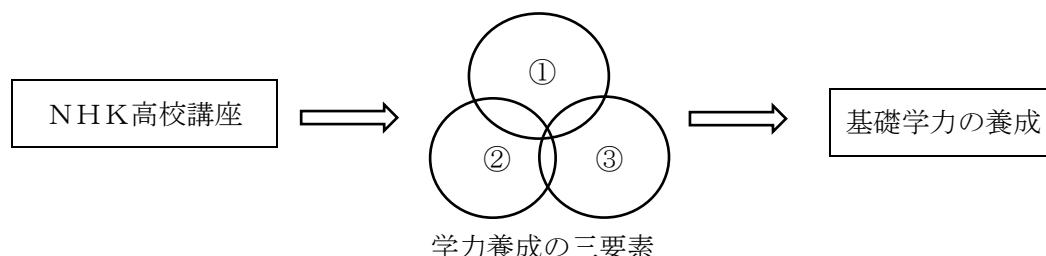
高校講座の番組は、視聴番組の外に、それに付属する「文字と画像で見る」「学習メモ」「学習のポイント」「理解度チェック」等によって構成されている。

- a 番組の構成要素、「文字と画像を見る」「学習メモ」「学習のねらい・学習のポイント」等によって学習内容や要点が示されている。このことによって、生徒は予め学習内容の要点を把握した上で番組視聴ができる。このことは、生徒の学習の初動体制ができることになり、その分、視聴時の内容把握や理解が深まる。また、視聴後の「理解度チェック」によって番組内容の要点・理解度を自己診断することができる。
- b 教科書の文字に加えて、学習内容を映像・音声により視聴覚に印象付け、学習理解を深めることができる。
- c NHK（日本放送協会）が保有する質の高い映像・音声資料や最前線の学術的知見を駆使した番組構成がされていることにより、質の高い、発展的な学習理解が可能となる。

(ウ) 学習内容の反復練習

- a 通信教育の方法において、生徒の学習は、「教科書学習」～「高校講座視聴」～「学習メモ」～「学習のまとめ」～（基礎ドリル）～「添削課題」と、教科書学習から添削課題に至るまで6つの過程を踏むことになっている。このことが、学習内容習得のために必要な反復練習に繋がっている。
- b 生徒は、「面接指導」～「考査試験」を受けることになるが、特に、「考査試験」に向けて何らかの準備、学習をすることになり、ここにおいて、学習の反復練習が加わることになる。

ここに、高校講座の活用は、学力養成の「三つの要素」の個々に働きながら、同時に、全体として基礎学力の養成に効果を齎していると考えられることができる。



[反復・繰り返し学習のための提案]

NHK 高校講座は、放送番組表に沿った学習、その番組表の必要箇所を選択した視聴、一番組の必要箇所にアクセスし、必要な箇所だけを視聴する、また、アーカイブにより過年度の番組視聴ができる等の利便性を提供している。さらに一点の提案をすれば、番組（履修科目）内容のみを初回から最終回まで通して視聴が可能となる編成はできないかという点である。

この場合、「オープニング」は不要であり、ワンクリック操作で必要な番組を連続視聴する、或いは選択した必要な放送回の番組を連続視聴できる様になると、番組視聴の反復・繰り返しが一層容易になり、より強固な学習と知識の習得に繋がると思う。

6 NHK 高校講座視聴による名古屋キャンパス生徒の学習成果について

先ず、名古屋キャンパスの施設自体が、今日まで5年6か月余りの間で、高校講座を活用する方法を学び、その活用による学習指導法を確立したと評価できる。

生徒について云えば、高校講座視聴が生徒自ら取組む通信教育の学習の中に組み込まれ、高校講座を活用した学習習慣が定着した。

また、高校講座への関心から学習内容の理解が進み、その結果、添削課題の作成が容易になり、添削課題の正答率が向上している。(資料編「10」参照)

さらに、高校講座の視聴内容を「学習のまとめ」を手書きでまとめることで、副次的に文章を書く習慣が身に付き、作文力が向上した。因みに、この「学習のまとめ」の提出数は、各年次で年間50枚程度である。(資料編「12」参照)

また、作文力の向上は、考査試験の成績に反映していると云うことができる。(資料編「11」「12」参照)

以上のことから、この名古屋キャンパスにおけるNHK高校講座を活用した学習指導は、確実にその効果が表われて居り、当初目指した「基礎学力の養成」と「学習習慣の定着」に向かっていると評価することができる。

7 NHK高校講座視聴の成果を踏まえた本校における「面接授業」の在り方について

本稿「4」で、通信教育の方法の中での本校の「高校講座視聴の位置付け」に触れた。

教科書学習 ～ 高校講座視聴 ～ 添削課題 ～ 面接指導 ～ 考査試験 ～ 単位認定 (再掲)

名古屋キャンパスにおける高校講座活用による「基礎学力の養成」と「学習習慣の定着」に一定の成果が出たことを評価した上で、次は、「面接授業」の位置付けを見直す必要が出てきた。

教科書学習 ～ 高校講座視聴 ～ (「学習のまとめ」) ～ 添削課題 の過程の中で、学習内容の理解と知識の習得において成果を上げていることで、従来実施してきた、「知識の習得」を主にした面接指導」を質的に改善することも可能になった。

加えて、通信教育の面接指導等の時間数は、少なく限られている。この限られた時間の中で、この「面接指導」を如何に位置付け、改善を図るかについての検討をする必要がある。

新学習指導要領(平成30年3月告示)では、「主体的・対話的で深い学び」に向けた「授業」に質的改善が唱えられている。(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』28頁 総則第3款「1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」参照)

本校では、教科・科目指導において、高校講座を含むメディア一般を活用して、「通信教育の方法」における「面接指導(授業)の改善」に取り組む計画である。その検討項目は、面接授業において、教科ごとに課題を設定した学習や論文作成などを挙げている。

以上の事柄は、翻って、教科・科目の学習指導が知識の習得に留まることなく、学校教育の命題である「人間教育」に深く繋がっていくものとする。

8 名古屋キャンパスから他のキャンパスへの展開について(現状と対策)

名古屋キャンパスにおいては、上述の様に成果が表われている。その成果を踏まえて、次の段階は、NHK高校講座を含むメディア一般の活用を如何にして他のキャンパスに展開するかが課題となる。これには、次の三つの側面から推進をする。

(1) 教科・科目担当教員への展開について

先ず、教科担当教員への周知・認知度を上げ、そこで、高校講座の活用に関心の高い教員・講師から活用を始める。その活用実績の積み重ねの中で、他の教員に展開する。

将来的には、高校講座を含むメディア一般の活用をテーマとする「研究会」や当該キャンパスに所属する教員対象の「研修会」等が考えられる。

(2) 他のキャンパスへの展開とその手法について

一部キャンパスでは高校講座活用の実施に踏み切っているが、他のキャンパスへの展開は、基本

的に名古屋キャンパスの実施状況を踏襲して行ない、その実施にあたり高校講座を視聴する対象者、対象科目を絞り、その視聴にあたっては、本研究で考察してきた「基礎学力養成（知識習得）の三要素」を確実に実施する方法を取って行く。

また、補習授業を含む面接授業時に、高校講座を紹介しながら、断片的ではあるが、その視聴体験をさせる。この様な積み重ねの中で、対象キャンパスにおいて、高校講座に対する生徒への周知が進み、その関心の度合いを深まるものとする。

また、対象のキャンパスにあつては、そのキャンパス内における成果・実績を以って他の生徒、他の学年に展開し、ひいては、当該キャンパス全体に周知を及ぼし、高校講座の活用を定着させて行く考えである。

- (3) その他、高校講座や他のメディア活用を必要とする生徒は、何らかの障害があつて学校に登校できない生徒、スポーツの競技大会等で登校日に学校に出校できない生徒等であり、その学習支援も模索している。(資料編「3-2」参照)

むすび

本放送教育研究の委嘱を受けて以来、課題の設定、研究計画より始め、試行錯誤の2年間であった。その中で、本研究の主な対象施設である名古屋キャンパスが、NHK高校講座視聴の実施に取り組み、その指導の要領が出来上がり、ある程度の成果を生んでいたことは幸いであった。

本研究が対象とした施設数・生徒数は小規模であるが、指標として表れる添削課題や考査試験の評点を見ると、確かに、高校講座視聴を取り入れた教科指導の成果が表れていると云うことができる。また、高校講座視聴を通して実施した「学習のまとめ」を手書きで記述させる手法は、作文力の向上に役立った。

以上の成果を基に、さらに生徒一人ひとりに対して、行き届いた指導となるよう研鑽を重ねたい。また、他の施設への展開は、当初計画した様には成果が出なかったが、その展開のための確かな足場を築くことができた。

本研究を通して、本校の放送研究は格段に進展し、NHK高校講座とメディア一般を活用する方法を身に付けることができた。

最後に、貴重な放送研究の機会を与えて頂いた全通研並びにNHKエデュケーショナル様に心よりの謝意を表したい。

〔参考文献〕

- 多田 俊文編著『放送と授業研究—新しい放送教育の探求—』日本放送協会、昭和59年
齋藤 孝『新しい学力』岩波書店、2016年
東京大学学校教育高度化センター編『基礎学力を問う—21世紀日本の教育への展望—』東京大学出版会、2010年
広岡 義之編著『教育の制度と歴史』ミネルヴァ書房、2009年
蔭山 英男『学力の新しいルール』文芸春秋社、2005年
岸本 裕史『続 見える学力、見えない学力—読み、書き、計算は学力の基礎—』大月書店、2002年
学校教務研究会編集『詳解学校運営必携（第4次改訂版）』ぎょうせい、平成17年
学校教務研究会編集『詳解教務必携（第8次改訂版）』ぎょうせい、平成21年
全国高等学校通信制教育研究会編『全通研放送教育研究』（第35号～第38号）

- 1 教育基本法（関連条項）
- 2 高等学校通信教育規程（関連条項）
- 3 「通信制の課程における教育課程の特例」（高等学校学習指導要領平成 21 年告示）
- 3-2 「通信制の課程における教育課程の特例」（高等学校学習指導要領平成 30 年告示）
- 4 日本ウェルネス高等学校 沿革とその特色
- 5 日本ウェルネス高等学校 「建学の精神」
- 6 日本ウェルネス高等学校 「教育目標」
- 7 名古屋キャンパスの施設、授業風景
- 8 学校規模、名古屋キャンパスの生徒数構成（平成 27 年度～31 年度）
- 9 NHK 高校講座番組・添削課題の対照表（令和元年度・前期・後期の例）
- 10 添削課題の得点一覧（視聴による効果）
- 10-2 各年度における生徒ごと、添削課題得点等
- 10-3 令和元年度 添削課題評点・考査試験成績平均点の相関表
- 11 考査試験成績平均点比較（平成 29 年度～令和元年度）
- 12 「学習のまとめ」（様式）、若干の作成例

1 教育基本法（関連条項）

（教育の目的）

第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。

（教育の目標）

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二～五 （省略）

2 高等学校通信教育規程（関連条項）

（趣旨）

第一条 高等学校の通信制の課程については、学校教育法施行規則（昭和 22 年文部省令第 11 号）に規定するもののほか、この省令の定めるところによる。

2 （省略）

3 （省略）

第二条 高等学校の通信制の課程で行なう教育（以下「通信教育」という。）は、添削指導、面接指導及び試験の方法により行なう。

2 通信教育においては、前項に掲げる方法のほか、放送その他の多様なメディアを利用した指導等の方法を加えて行うことができる。

3 通信教育においては、生徒に通信教育用学習図書その他の教材を使用して学習させるものとする。

3 「通信制の課程における教育課程の特例」（『高等学校学習指導要領（平成 21 年告示）』24 頁 第 1 章 総則 第 7 款 4）

学校が、その指導計画に、各教科・科目又は特別活動について計画的かつ継続的に行われるラジオ放送、テレビ放送その他の多様なメディアを利用して行う学習を取り入れた場合で、生徒がこれらの方法により学習し、報告課題の作成により、その成果が満足できると認められるときは、その生徒について、その各教科・科目の面接指導時間又は特別活動の時間数のうち、各メディアごとにそれぞれ10分の6以内の時間数を免除することができる。ただし、免除する時間数は、合わせて10分の8を超えることはできない。

3-2 「通信制の課程における教育課程の特例」(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』27頁 第1章 総則 第2款 5)

学校が、その指導計画に、各教科・科目又は特別活動について体系的に行われるラジオ放送、テレビ放送その他の多様なメディアを利用して行う学習を計画的かつ継続的に取り入れた場合で、生徒がこれらの方法により学習し、報告課題の作成等により、その成果が満足できると認められるときは、その生徒について、その各教科・科目の面接指導の時間数(以下「面接指導等時間数」という。)のうち、10分の6以内の時間数を免除することができる。また、生徒の実態等を考慮して特に必要がある場合は、面接指導等時間数のうち、複数のメディアを利用することにより、各メディアごとにそれぞれ10分の6以内の時間数を免除することができる。ただし、免除する時間数は、合わせて10分の8を超えることはできない。

なお、生徒の面接指導等時間数を免除する場合には、本来行われるべき学習の量と質を低下させることがないように十分配慮しなければならない。

4 日本ウェルネス高等学校 沿革とその特色

学校法人タイケン国際学園 日本ウェルネス高等学校は、平成18年2月に愛媛県の設置認可を受け、同年4月、広域通信制普通科・単位制高校として愛媛県今治市大三島町に開校した。

本学園及び本校は、東京に本部を置く学校法人タイケン学園を母体として誕生し、その学園が永年培ってきたスポーツを通しての人間教育を継承し、スポーツ特化型・専門教育連携型の新しいスタイルの高等学校として出発した。

タイケン学園の教育は、幼児教育・幼児体育教育に始まり、それは今日、公益財団法人幼少年体育協会として結実し、全国に多くの幼少年体育指導者を育てている。また、専門教育機関として日本ウェルネススポーツ専門学校、日本ウェルネススポーツ大学を始めとする各種の専門教育機関を設置している。

本校の高等学校としての教育は、生徒の多様な要望に応じて、これらの教育機関と連携して、生徒の将来の職業に繋がる体験や実習ができる場所に特色がある。

また、本校の開校時には、普通科の中に「スポーツコース」を始めとして「総合コース」「情報科学コース」の3コースを設置し、後に「音楽」「保育」「ペット」「製菓」の4コースを加えて7コースとした。

令和2年3月現在、生徒収容人員は600名、面接指導等実施施設は、関東以西沖縄まで12施設を設置している。

5 日本ウェルネス高等学校「建学の精神」

次の人材育成を掲げている。

- (1) 物事を科学する精神を養う。(科学の精神)
- (2) 質実剛健な人材を養う。(質実剛健な精神)
- (3) 日本人としての資質を保ったグローバルな人材を養う。(国際人の養成)

6 日本ウェルネス高等学校「教育目標」

学習・体験・スポーツによる実践を通して、徳育、体育の人間教育を施し、生徒自らが学び、考え、行動する能力を養い、併せて、生活習慣を正し、社会のルールを守り、自己と他者の関係を理解する関係性を養う教育を徹底し、「生きる力」を育成する

7 名古屋キャンパスの施設、授業風景



8 学校規模、名古屋キャンパスの生徒数構成（平成 27 年度～令和元年度）

	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	令和元年度
在宅コース生（比率）	1.3	0.75	0.86	1.2	0.79
通学コース生	1	1	1	1	1
名古屋生徒数（割合）	6.5%	4.7%	4.3%	5.2%	4.2%
学 則 定 員	600 人				
面接指導等実施施設	10	11	11	11	12

凡例：生徒数の割合は、収容定員に対するもの。在宅コース生の比率は、通学コース生 1 に対するの。

9 NHK 高校講座番組・添削課題の対照表

表 1（課題/番組対照表 令和元年度 1 年次生 前期 3 科目の例）

課題 No	→	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
国語総合	番組	第 3 回	第 14 回	第 22 回	第 33 回	第 35 回	第 42 回
地理 A	番組	第 1～10 回	第 26～32 回	第 33～40 回	—	—	—
現代社会	番組	第 1～10 回	第 11～13 回	第 14～19 回	—	—	—

表 1-2（課題/番組対照表 令和元年度 1 年次生 後期 3 科目の例）

課題 No	→	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
国語総合	番組	第 53 回	第 56 回	第 79 回	第 9 回	第 19 回	第 20 回
地理 A	番組	第 38 回	第 13 回	第 21 回	—	—	—
現代社会	番組	第 20 回	第 29 回	第 19 回	—	—	—

凡例：番組の回数は、各放送番組の回数を示す。

表 2（添削課題進捗・提出表 令和元年度・前期 1 年次生 3 科目の例）

課 題	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回
提出日	5/10	5/24	6/7	6/21	7/5	7/19
国語総合	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
地理 A	—	No. 1	—	No. 2	—	No. 3
現代社会	—	No. 1	—	No. 2	—	No. 3

表 2-2 (添削課題進捗・提出表 令和元年度・後期 1 年次生 5 科目の例)

課 題	第 7 回	第 8 回	第 9 回	第 10 回	第 11 回	第 12 回
提出日	9/17	10/4	10/8	11/5	11/26	12/6
国語総合	N o. 7	N o. 8	N o. 9	N o. 10	N o. 11	N o. 12
地理 A	—	N o. 4	—	N o. 5	—	N o. 6
現代社会	—	N o. 4	—	N o. 5	—	N o. 6

1 0 添削課題の得点一覧 (視聴による効果)

表 1 各年度 (27 年度～29 年度) における生徒の得点 (平均点) の推移

年 度	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	生徒	得点	生徒	得点	生徒	得点
1	Y. N	92 点	Y. H	83 点	Y. A	94 点
2	I. R	92 点	Y. N	91 点	Y. H	83 点
3	N. C	90 点	I. R	94 点	Y. N	94 点

凡例：上表の生徒は全員通学コース生。平成 28 年度、平成 29 年度に高校講座視聴。

：得点は添削課題提出時のもの。

1 0-2 各年度における生徒ごと高校講座視聴の有無・添削課題得点等

表 2-1

A. Y (在宅生)	年次	視聴	最高点	最低点	平均点	科目数	課題数
27 年度	2	無	100 点	18 点	78 点	7 教科	54
28 年度	3	有	100 点	63 点	86 点	7 教科	49

表 2-2

I. R (通学生)	年次	視聴	最高点	最低点	平均点	科目数	課題数
27 年度	2	無	100 点	64 点	92 点	7 教科	54
28 年度	3	有	100 点	72 点	94 点	7 教科	49

表 2-3

H. M (在宅生)	年次	視聴	最高点	最低点	平均点	科目数	課題数
27 年度	1	無	100 点	18 点	69 点	9 教科	66
28 年度	2	有	100 点	18 点	69 点	8 教科	58
29 年度	3	有	100 点	22 点	66 点	7 教科	49

表 2-4

Y. N (通学生)	年次	視聴	最高点	最低点	平均点	科目数	課題数
27 年度	1	無	100 点	63 点	92 点	9 教科	66
28 年度	2	有	100 点	62 点	91 点	7 教科	54
29 年度	3	有	100 点	77 点	94 点	7 教科	49

表 2-5

H. M (在宅生)	年次	視聴	最高点	最低点	平均点	科目数	課題数
28 年度	1	無	100 点	18 点	69 点	9 教科	66
29 年度	2	有	100 点	18 点	69 点	8 教科	58
30 年度	3	有	100 点	22 点	66 点	7 教科	49

10-3 令和元年度 添削課題評点・考查試験成績平均点の相関表

表3-1 1年生

生徒	科目	国語総合	地理A	現代社会	数学I	化学基礎	保健	英語I	社会情報
A(通学)	添削課題	88.7	92.7	89.7	98.1	97.8	99.0	95.8	97.0
	考查試験	60.0	79.5	56.0	38.5	78.5	74.0	50.0	90.0
B(通学)	添削課題	87.6	79.8	86.5	96.4	84.5	97.5	95.2	91.2
	考查試験	73.0	44.5	53.5	45.5	59.0	54.0	43.0	92.0

表3-2 2年生

生徒	科目	現代文B	日本史A	数学A	生物基礎	地学基礎	英語II
C(通学)	添削課題	92.1	95.2	94.9	91.2	95.8	92.2
	考查試験	67.0	61.5	78.0	79.0	83.0	61.0
D(通学)	添削課題	85.4	89.3	94.3	85.0	91.2	92.5
	考查試験	71.0	78.0	80.0	88.5	82.0	67.5
E(在宅)	添削課題	84.1	92.8	79.8	94.2	90.8	88.9
	考查試験	59.0	30.0	37.0	42.5	52.0	30
F(在宅)	添削課題	73.6	87.7	61.4	77.7	75.8	70.1
	考查試験	67.0	35.5	66.0	80.0	69.5	48.5

表3-3 3年生

科目	科目	国語表現	世界史A	政治経済	英語III	英語表現	家庭基礎
G(通学)	添削課題	84.0	89.7	90.2	97.3	94.2	95.8
	考查試験	97.5	97.0	92.0	98.5	89.5	100
H(通学)	添削課題	77.6	92.8	82.5	92.7	—	—
	考查試験	98.0	88.0	94.0	94.0	—	—
I(在宅)	添削課題	91.0	87.0	92.5	96.4	93.0	95.5
	考查試験	89.0	85.5	93.0	99.5	92.0	100
J(在宅)	添削課題	59.4	56.7	54.8	58.6	62.8	54.8
	考查試験	57.5	32.5	33.5	40.0	48.5	83.0

11 考查試験成績平均点比較(平成29年度～令和元年度,成績上位者,通学生・在宅生平均点)

表1 平成29年度 1年次 成績(前期・後期の平均点)

科目/対象者	対象	国語総合	地理A	現代社会	数学I	化学基礎	保健	英語I	社会情報
成績上位者	①	98.5	98.0	96.0	89.0	100	100	100	100
成績上位者	②	86.5	84.0	70.0	81.0	98.5	83.0	95.0	94.0
① 通学生	3	66.0	56.8	42.6	46.0	80.8	41.4	45.2	84.0
② 在宅生	2	92.5	91.0	83.0	85.0	99.3	91.5	97.5	97.0
① ②平均値	5	79.3	73.9	62.8	65.5	90.1	66.5	71.3	90.5

表2 平成30年度 2年次 成績(前期・後期の平均点)

科目/対象者	対象	現代文B	日本史A	数学A	生物基礎	地学基礎	英語II
成績上位者	①	93.5	89.0	96.0	92.5	98.5	98.0
成績上位者	②	81.0	63.0	64.0	69.0	69.0	83.0
① 通学生	4	67.9	49.9	69.1	62.6	65.0	52.0
② 在宅生	2	77.8	70.5	64.0	69.0	69.0	82.3
① ②平均値	6	72.9	60.2	66.6	65.8	67.0	67.2

表3 令和元年度 3年次 成績（前期・後期の平均点）

科目/対象者	対象	国語表現	世界史 A	政治経済	英語Ⅲ	英語表現	家庭基礎
成績上位者	①	97.5	97.0	92.0	98.5	89.5	100
成績上位者	②	89.0	85.5	93.0	99.5	92.0	100
成績上位者	③	98.0	88.0	94.0	94.0	—	—
① 通学生	5	88.6	66.5	70.0	72.6	63.0	81.5
② 在宅生	5	74.4	61.8	62.5	80.8	70.3	90.5
① ②平均値	10	81.5	63.7	66.3	76.7	66.7	86.0

凡例：成績上位者は、対象者の内、上位2～3人を選んだ。

：①通学生、②在宅生の対象者は、各々2～5名。その平均値は、上位者を含む総人数のもの。

：①通学生は、名古屋キャンパス施設で高校講座視聴，②在宅生は、自宅で NHK 高校講座視聴。

1.2 「学習のまとめ」（様式）、若干の作成例

[NHK高校講座視聴 学習のまとめ]

学 年		氏 名	
視聴日	科目	番組	課題 No.
<p>「学習のまとめ」用紙はA4、高校講座視聴後に学習内容、感想等を手書きでまとめる。</p>			
学校記入欄	令和 年 月 日		検印
	摘要		

以下、若干の例（PDF2枚、2頁）


高 校 講 座

名古屋		ういほ高等学校	通	学年	氏名	T.M
月日	9 / 13	科目	世界史 ⑩	タイトル	国史記5-00の国民国家	
学 習 の ま と め						
<p>国民国家とは、言語や文化などを共有する均質な国民によって作られる国家のことという。フランスのパリ郊外にある世界遺産「ヴェルサイユ宮殿」は17世紀フランス国王ルイ14世によって作られた、フランスを象徴する王宮。1871年、プロイセンの国王はこのヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国の成立を宣言した。1814年、ウィーン会議が開かれヨーロッパをフランス革命以前の古い政治体制に戻すことが決まったことを「ウィーン体制」という。1848年2月、パリで選挙権と労働者の権利を求めて民衆が武装蜂起し、当時の王政を倒したことを「2月革命」。これをきっかけにウィーン体制は崩壊していった。1848年3月、ドイツやオーストリアに民主権や憲法制定、言論・集会・結社の自由などの権利を求める運動が広がった（3月革命）という。ビスマルクという人物は労働者に対して弾圧だけでなく、国家による労働者の保護対策を行った。国民国家となるための学校の制度を整えた。優秀な労働者、優秀な兵士を育てるといって学校を被割とした。昔の子どもたちは小さいときから競争に関わっていて大変だったんだなと思いました。</p>						

学校記入欄		/ 年 9 月 20 日		印
摘要	世界史 27頁			

処理済

高 校 講 座

学号		2学年 氏名 M. T			
日付	2/11	科目	日本史 3	タイトル	大和王権と古墳文化
学 習 の ま と め					
<p>古墳の出現と大和王権の成立</p> <p>3世紀後半ごろ、近畿地方から瀬戸内海沿岸にかけて出現した。前方後円墳と呼ばれる大きな墳丘をもつ古墳は、しだいに西は九州南部、東は東北地方南部にまで広がっていく。形が副葬品が共通する古墳が各地に広まるとは、それまでの小国を統一する王権が誕生したことを意味する。その中心は大和を中心とした近畿地方で、4世紀初めの倭国では、古墳を造った各地の王が、大和地方の王を盟主として政治的連合体を形成するようになったと考えられる。これを大和王権と呼ぶ。大和王権の王は、大王と呼ばれるようになる。</p> <p>まとめ</p> <p>5世紀の前方後円墳には、大仙陵古墳や菅田御廟山古墳のように、世界的に見ても墳墓として隔絶した規模のものが多く造られるようになった。7世紀の古墳は終末期古墳と呼んで区別している。</p>					
学校記入欄	21年	2月 11 日			
	摘要	日本史 3回			

処理済